

# 「William Caxton の *The Game of Chess* について」(2)

有 村 安 生

## Abstract

The purpose of this study was to investigate morals, ethics, and social policies in the book of *the Game of Chess* which is regarded as an allegory of human society and especially to analyze the moral lessons to be found out in each class, and to demonstrate the moral construction in the medieval Christian society.

## Key words

medieval European society, moral lessons, political policies

## 序章

中世社会の組織は国王を頭とする器官組織体と考えられ、臣下はその手足として働く一つの組織体であり、その各階級には伝統的にキリスト教社会の守るべき規範、徳目、政策などが設定されていた。それで、前回は国王、女王、司教、騎士の徳目、政策等を中心に分析、説明してきたが、今回は武将、庶民(1. 農民、職人 2. 鍛冶屋、大工 3. 書記、工芸職人、皮職人、服職人、屠殺業、床屋 4. 商人、両替商 5. 医者、薬剤師 6. 居酒屋、宿屋の亭主 7. 番人、収税人、役人 8. 賭博人、飛脚人)の徳目等を分析し、中世社会における各階級における守るべき徳目、避けるべき徳目を分析し、それがいかに中世キリスト教社会の規範作りに役立っているかを論証するつもりである。

### 1. 武将Rooksの役割

武将は王の代理人として地方を治める大事な役目を負い、王位に相応しい徳目が求められている。<sup>1</sup>

第一に求められる徳目は正義で、王の代理人である武将が傲慢な欲 *pride* を持ち、不正 *untrewe* を働けば、国王の名も汚され、正義も失われ、王国も崩壊することになるので、彼らには法を守るための正義の徳目が求められる。中世における守るべき正義 *justice* とは法を

守ることであり、その他、契り、約束、誓約、契約書、忠誠心 (covenantes, promyses, othes, writynges, trouth) を守ることであり、例証文を通して武将の守るべき徳目などが具現化されている。<sup>2</sup>

次に武将に求められている徳目は人を助ける優しい心の発露である憐憫、慈悲の心 *pyte* であり、不幸にあったものへの憐み、罪を犯したものへの更生の赦し、貧しきものへの施しのための憐みなどの徳目が重視され、これらの憐憫、慈悲 *pity* の情愛は臣下への許しの感情、臣下への心使いの気持ち、臣下への慰めの言葉が生じてくる。<sup>3</sup> 次に高い地位に付く人ほど謙虚な、謙遜した、慎ましい心 (*humble and meke*) を持つことも重要で、臣下の信頼を得る徳目の一つとして位置付けられている。<sup>4</sup> 忍耐力も武将にとっては重要な徳目で、忍耐力に対する武将の取るべき徳目も説かれ、その反対の憤怒 *wrath* は武将にとっては注意すべき悪徳である。<sup>5</sup> 清貧 (*wilful poverté*) はキリスト教に基づく最低限の私欲を控えた生活であり、傲慢な生活を避けるための徳目である。<sup>6</sup> そして、ローマの枢機卿ヨハネはかつての美德、謙遜 *humilite*、忍耐 *patience*、分別 *wisdom* などの美德が今日、悪意に変わって来ていると嘆く文が見られる。

Thus by this richesse poverté is not onely corrupt in thysé dayes ner the cyte ner the maners, but also the thoughtes of the men ben corrupt by this covetise and by felonye that is worse than ony other enemye. (II, v)  
(裕福になったことによって、今日、町では清貧が失われ、人々の考えも貪欲や獐猛心によって墮落し、更に敵方以上に悪化してきている。)

最後に武将は寛大な気持ちで、臣下に対しては十分な気前よい態度 (*large and liberal*) を示し、充分な報酬を与え、臣下の信頼を得るべきとして、武将の持つべき徳目を説明している。<sup>7</sup>

以上の武将の取るべき徳目には、次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示され、中世時代の John Gower などの14世紀の政治学の書に見出される徳目を踏襲しているのが見出される。

		美德	悪徳
1	政治	正義 <i>justice</i> (law, swear, loyalty)	不正 <i>unjustness</i>
2	政治	憐憫 <i>pity</i>	殺人 <i>homicide</i>
3	倫理	謙遜 <i>humility</i> , 謙遜 <i>modesty</i> 従順 <i>obedience</i>	傲慢 <i>pride</i> , 傲慢 <i>boasting</i> 不従順 <i>disobedience</i>
4	倫理	忍耐 <i>patience</i>	怒り <i>anger</i>
5	倫理	清貧 <i>poverty</i>	裕福 <i>wealth</i>
6	倫理	気前よさ <i>generosity</i> , 寛容 <i>liberality</i> 寛大 <i>largess</i>	貪欲 <i>avarice</i> , 強奪 <i>rapine</i> 聖職売買罪 <i>simony</i>
7	倫理	節制 <i>moderation</i>	浪費 <i>prodigality</i>

武将は上流階級に属しているので、王侯の身に付けるべき学問として、まず政治学の分野にある正義、憐憫が求められ、次に倫理学の分野にある謙遜、忍耐、気前よさ、節制の他に、清貧という徳目が求められ、必要以上のものを消費し、派手な生活をするのを戒め、そして、各項目毎に例証文を挙げ、具体的に守るべき徳目を論じている。

## 2. 歩(pawn)、即ち、庶民について

### 1) 農民、職人

彼らに対する徳目はまず、神への忠誠心loyalteであり、彼らに与えられた大地とそこから生み出される農作物への感謝、神の教会への1/10税の支払い、神に帰依する心を持つことが重視され、<sup>8</sup>次に、主君に対しての忠誠心 obedience, loyalty, faithfulness が求められ、ヨーロッパ中世キリスト教社会の独特な精神構造が見出される。<sup>9</sup>

庶民の生活はあくまで質素な生活、清貧であり、怠惰の罪 ydelness を避け、真面目に働くことが求められている。この怠惰 idleness, sloth の罪は 酩酊 drunkenness 等による罪も生むので日々、真面目に活動 activity, prowess することが求められ、特に派手な庶民生活の中に見られる傲慢 pride, 嫉妬 envy, 貪欲 covetise の罪はけして抱かないようにと論じている。

以上のことから農民の徳目としては次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	倫理	献身 loyalty 従順 obedience	偽善 hypocrisy 不従順 disobedience
2	倫理	清貧poverty	裕福 wealth
3	倫理	節制 measure 滋養 nourishment	大食 gluttony 酩酊 drunkenness
4	倫理	剛勇 prowess 活発 activity	怠惰 sloth 怠惰 idleness, laziness
5	倫理	謙虚 humility	傲慢 pride
6	倫理	愛徳 charity	嫉妬 envy
7	倫理	正義 justice	貪欲 covetise

彼らは下層階級で、政治学的な徳目よりは、倫理的な徳目を守ることに重点が置かれ、中世社会の精神的規範が見出される。

### 2) 鍛冶屋、大工

歩としての第2の職人は鍛冶屋、大工、船大工職人などで、彼らの客は彼等に全財産、あるいは生命を任せることになるので、客に対しての彼らの信用(fayth&truste)が第一のものとなる。例えば、船大工には安全な船の造船、大工には安全な家、金細工師には金の信用問題などが重要視される。<sup>10</sup>

He that leseth his fayth and beleve may lose no gretter ne more thyng,  
and fayth is a soverayn good …, (III, ii)

(信用、信頼を失うことほど大きな痛手はない。信用は最高の徳である。)

次に、彼らの生活面においては私欲を抑えた、お互い分かち合う生活が大事で、個人の利益のみを追求する社会には悪徳が蔓延するとしている。

And here in ought we to folowe nature, for she sheweth to us that we shold do comyn proffyt, one to another. And the first fondement of justice is that no man shold noye ne greve other, but that they ought do the comen proffyt. (Ⅲ. ii)

(お互い利益は分かちあうべきであると自然の女神は指し示している。誰も他人を悲しませるべきでなく、お互い利益を分かち合うことが最初の正義の根本である。)

それ故、互助の精神を守り、悪徳の嫉妬、疑惑 suspicion の罪は避けるべきとし、臣下に対しては希望 good hoop を約束し、剛勇な気持ち hardy coage を持って統治すれば、危険から避けることができるとする。<sup>11</sup>

以上のことから職人に対しての徳目としては次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	政治	信用 faith	偽善 hypocrisy
2	政治	正義 justice	食欲 covetousness
3	倫理	救済 help, 慈悲 charity, 希望 hope	略奪 supplanting, 嫉妬 envy 疑惑 suspicion
4	倫理	勇気 prowess	怠惰 sloth

職人にとっては、客の信用、契約の履行が第一として、政治的な徳目が挙げられているが、下層階級の中での精神的規範に重点が置かれている。

### 3) 書記、工芸職人、皮職人、服職人、屠殺業者、床屋職人など

第3の歩は司教(=裁判官)の前にいる書記官たちで、信用、信頼(true honest countenance, truth in words)の美德が求められる一方、<sup>12</sup>仕事柄、女性と付き合うことも多いことから貞節(chastity, continence)を持ち、色欲(lechery)のような悪徳を退ける勇気が要求される。<sup>13</sup> また、職人たちに求められる徳目には“約束、契約”を守るという言行一致(one accorde in good by entente, by word and by dede)の徳目が求められる。<sup>14</sup>

以上のことから書記などに対する徳目としては次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	政治	信用 truth, faith	偽善 hypocrisy, fraud
2	倫理	善意 goodwill, 慈悲心 charity	裏切り treachery, 嫉妬 envy
3	倫理	愛情 affection, 友情 friendship	憎悪 hatred, 裏切 treachery
4	倫理	貞節 chastity, continence	色欲 lechery, incest
5	政治	正義 justice	食欲 covetousness

書記などは支配階級の身近にいる以上、政治的な徳目も重視され、また下層階級との付き合いも多いことから、倫理的な面も重視されている。

#### 4) 商人、両替商

第4の歩は商人、両替商、収税人などで、仕事柄、強欲、貪欲の罪 *avarice, covetousness* を抱きがちになるので、その罪は避けるべきであるとしている。<sup>15</sup>

*avarice destroubleth fayth, poest, honest and al thise other good vertues, and taketh for thyse vertues pryde, cruelt and to forgete God, and sayth that al thynges be vendable. (III, iv)*

(強欲は信頼、力、正直さなどの美德を破壊し、これらの美德の代わりに傲慢さや残酷な行為を働き、神を忘れ、全てのものは売却できるものであると公言している。)

また、商人は貸し借りの原則は守るべきで、けして虚偽の取引をすべきでないとしている。それ故、商人、両替商たちにとっては金の貸し借り、日時、条件などは明確に把握し、顧客の信用 *faith, honest, truth* を第一として商いをすることが求められている。<sup>16</sup>

以上のことから両替商などの徳目としては次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	倫理	寛大 <i>generosity</i>	強欲 <i>avarice</i>
2	倫理	正義 <i>justice</i>	貪欲 <i>covetous</i>
3	政治	信用 <i>faith</i>	裏切り <i>hypocrisy</i>
4	政治	信頼 <i>truth</i>	虚偽 <i>fraud, deceive, beguile</i>

商人の貪欲、虚偽は人を悲しませるような事件を引き起こすとして、それがここでは例証文で具現化されているが、それは現実的な政治的な手法で解決することが求められるとして、政治的徳目も重視されている。

#### 5) 医者、薬剤師、漢方医など

第5の歩は医学(内科、外科、薬剤師など)などの道に従事する人々で、仕事柄、多大の知識と知恵(*knowledge, wisdom*)が必要とされ、最低、中世の自由7学科 *Seven Liberal Arts*(文法、論理、修辞、算術、幾何、音楽、天文)を身に付け必要がある。なぜならば、人命を預かる以上、医者には良き作法、言葉使い、貞節さ、健康、律儀さのみならず、患者の状態を研究し、それを治すための知識、技術に精通している必要があり、法律家のように論争を求めるべきでないとする。また、上流階級の貴婦人などと接する機会が多いことから貞節 *chastity, continence* の徳目も重視されている<sup>17</sup>。

歓喜 *joy* という徳もまた喜ばしいもので、体全体に喜びを拡げるので、人は皆この徳を当然ながら持ちたがり、特に良心の徳から来るものであればさらに喜ばしいとしている。このような歓喜はもちろん賢人たるものは皆持っていて、これは自然の女神から授けられたもので

ある以上、けして運命の女によっても除去されないとしている。しかしながら、極端な歓喜は避けるべきで、このような喜びは死に到る場合があるので避けるべきであるとし、いろいろな例証で極端な喜びは人命を失わせるとしてこれを戒め、医者としてこのような原因と治療の仕方でも心得るよう諭している<sup>18</sup>。

また、薬剤師などは医者への指示通りに勤勉で、活発な心 *diligence, activity* を持って、まじめに働き、怠慢 *neglygence* な行為は避け、主たる仕事の薬を作るときでも処方箋通りに量り、重さに対しての虚偽は避け、人に毒などを与えることなどの不注意は避け、医者への指示通りにするよう諭している。

外科医も優しく、憐憫の情 *debonair, amiable, pyte* を持って患者と接し、けして、急いで *hasty* 対処せず、原因が明らかになってから患者の病を治すよう対処すべきで、そうでなければ病気の治療者ではなくて、人殺しとの汚名を着せられることになる。それでまずは己を身綺麗にして、それから他人の病を治す人になるべきであるとしている。

以上のことから彼らの徳目としては次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	倫理	勤勉 <i>diligence</i> 知識 <i>knowledge</i> 活発 <i>activity</i>	怠慢 <i>negligence</i> 怠惰 <i>idleness</i>
2	政治	知恵 <i>wisdom</i>	
3	倫理	貞節 <i>chastity, continence</i>	色欲 <i>lechery</i>
4	倫理	優しさ <i>gentleness</i>	争い <i>contention</i>
5	政治	憐憫 <i>compassion</i>	人殺し <i>homicide</i>
6	政治	性急 <i>haste</i>	熟慮 <i>deliberation</i>
7	倫理	健康 <i>health</i>	病気 <i>illness</i>

医者への身に付けるべき徳目は王侯への身に付けるべき徳目と重複し、理論哲学(神学、自然学、数学)、雄弁術(文法、論理学)、実践哲学(倫理学、家政学、政治学)も学ぶよう要請され、知恵 *wisdom* など他の庶民と異なる徳目も要求されている。

## 6) 居酒屋、宿屋の亭主

第6の歩は居酒屋や宿屋や食料販売人たちで、彼らは仕事柄、悪徳の大食や酩酊 *gluttony, drunkenness* の罪に陥りやすく、そこから争い *contention*、色欲 *lechery* 等の罪が引き起こされ、理性も麻痺し、体も壊してしまうという。<sup>19</sup>

the vice of glotonye provoketh lecherye, wherof cometh forgetenes of his mynde and destruccion of alle quyck and sharpe reason, and is cause of distemperaunce of his wyttes. (III, vi)

(大食の罪は色欲を喚起し、精神を忘れさせ、直ちに理性を破壊し、知性のバランスを失わせてしまう。)

彼らの接客も重要で、優しい心、言葉遣い (debonaire, gentleness, fair speech) を持って客に接し、安心さすという王侯の身に付けるべき雄弁術も大事で、ましてや、お客のものを奪うというような貪欲、強欲 covetousness, avarice の罪を抱くことがないように配慮すべきであるとし、このような悪徳の行為は残酷、卑劣な行為で、神の怒りを買ひ、いつかは真実の裁きを受けるとして例証文をあげ、戒めている。<sup>20</sup>以上のことから次のような美徳とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美徳	悪徳
1	倫理	節制 measure 節酒 sobriety	大食 gluttony 酩酊 drunkenness 贅沢 superfluity
2	倫理	貞節 chastity	色欲 lechery
3	政治	正義 justice 寛容 generosity	強欲 covetous 貪欲 avarice
4	倫理	優しさ gentleness 愛情 affection	憤怒 contention 憎悪 hatred
5	倫理	憐み pity mercy	残酷 cruelty 殺人 homicide

仕事柄、大食、色欲の罪が重視され、倫理的な面が主に強調されて、例証文で更に詳細にその罪を戒めている。

#### 7) 番人、収税人、役人

第7の歩は町の門番、収税人、通行徴収人などであり、彼らは仕事柄、左手に鍵、右手に尺、腰に財布を下げ、正しく測り、正しく徴収することが求められ、仕事柄、騎士達よって直接指導される立場にある。町の番人は治安維持のために仕事柄、活動的な真面目な気持ちの心を持ち、町を隈なく見回り、危機を未然に防ぎ、真心を持って社会の利益のために働くことが求められている。

The keepers of the cyte be diligent, besy, clere sayeng and lovers of the comyn prouffyt and wele, as wel in the tyme of pees as in the tyme of warre. (III.vii)  
(町の番人は戦いのときでも平和なときでも真面目で、活動的で、正直に話し、公益を愛する人でなければならない。)

その他、市民ために良心を持ち、愛郷心を持ち、けして悪意を持って市民を陥れるような悪意を持つてはいけなとし、人の考えを見通している神に対しての畏怖の念を絶えず抱き、仕事や幸せをもたらしている神の恩寵にも感謝すべきである。<sup>21</sup>町の公務に携わる人々は当然、賢明な行動を取ることが要求され、誠実な気持ちを持って庶民に接し、公務の金をけして私的に流用すべきでなく、悪意の気持ちで得た富はけして身に付かないとし、税、通行税も要求された額だけを徴収し、平等にあらゆる人に接し、忍耐の美徳を持ち、けして貧しき人々に悪意を持つべきではないし、ここでは忍耐の美徳を説いている例証文などが見出される。<sup>22</sup>

And pacience is a right noble vertu, as a noble versiefier saith that pacience is a right noble maner to vaynquyssh. For he that suffreth overcometh.

And yf thou wylt vaynquysshe and overcome, lerne to suffre. (III.vii)

(忍耐は崇高な美德であり、詩人が言うように忍耐は手に入れるべき崇高なものであり、忍耐するものはいかなる困難も克服するだろうし、困難を克服するものは忍耐を学ぶことになる。)

以上のことから次のような美德とその反対の避けるべき悪徳が示されている。

		美德	悪徳
1	倫理	活動 activity 勤勉 diligency	怠惰 idleness 怠慢 negligence
2	倫理	忍耐 Patience	憤怒 anger envy
3	政治	正義 justice	貪欲 covetousness

町を守り、税を集めることからまず倫理的問題が重視され、怠惰な罪により町が崩壊する危険性があることから、勤勉などの徳が重視されているのが見出される。

#### 8) 召使、賭博人、飛脚人など

最後の章では各地の情報を集める召使や賭博人や飛脚人の問題が扱われ、賭博人などは仕事柄、多くの金を無駄に浪費し、道楽に耽りがちになるので、絶えず武将が無駄に消費しないよう監視しておく必要があるとしている。貧困に陥れば、泥棒などの強盗の罪を犯し、社会の秩序を乱す恐れがある。

And ye shalle understonde that fole large is a ryght evyl vyce. For how wel that she doeth good and prouffyt somtyme to other, yet she doth harme and dommage to hym that so wasteth. (III.viii)

(浪費は悪徳であることを理解すべきである。たとえ他人に利益をもたらしても、浪費はその人に害を及ぼすものである。)

例証文の中にはシェークスピアのリア王のように、無駄に財を使いすぎたものには子供からも結局見放されてしまうという戒めの例証が見出される。<sup>23</sup>

And ye shal understonde that hit is a grete folye to dyspende and waste his good in hope for to recover hit of other, be hit of sone or doughter, or right nygh kynne. For a man ought to kepe in his hand in dispendyng his owne goodes tofore he see that he dispende other mennys. (III.viii)

(他人から助けをもらえるという望みで、自分の財産を浪費するものはいかに愚かであるかということを理解すべきである。たとえ、自分の息子、娘、近親者であろうとも、他人のものを浪費する前に自分で消費するものは自分の所に持っているべきである。)

このように浪費がこの時代にはいかに重い罪であるかを論じている例証であり、浪費する者たちは領主を悲しませるような情報をばら撒いたり、裕福な人々に争いを吹っかけ、脅しを



かけたりと社会の不利益になるようなことばかりしているとしている。特に、賭博者、好色漢などは彼らの貪欲、好色 covetise, lechery により、貧困を生み出し、盗み、酩酊を繰り返し、大食漢の罪を犯すなど連鎖の悪徳を生み出し、特に貴族などに従って戦争する時には味方の勝利よりは個人的な盗み、悪事を働き、味方の勝利を失わせることもありえる。また、飛脚の仕事は領主にとっては大事なもので、彼らの遅れは領主に対する被害、友人への損失を引き起こし、商売においても損失を生じさせ、結局は国家の不利益をももたらすのであり、それ故、彼らの仕事においては勤勉、スピーディな仕事が求められる。

以上のことから召使、賭博人、飛脚人などの徳目としては、次のような美德とその反対の避けるべき悪徳も示されている。

		美德	悪徳
1	倫理	節制 moderation 滋養 nourishment	大食 gluttony 浪費 prodigality 酩酊 drunkenness
2	倫理	活動 activity	怠惰 idleness
3	倫理	早急 hasty	遅配 delay
4	倫理	貞節 chastity	色欲 lechery

最後の階層に出てくる賭博人などは浪費という当時にとっては大事な食料などの問題があるので、倫理の項目で特に重視されている。

以上、武将を除く庶民に対しての守るべき徳目は主に倫理学に基づく徳目が求められ、上流階級との接触の多い階級には政治的倫理も求められているのが見出され、ヨーロッパ中世社会の聖職者、騎士、商人、庶民など各階級の守るべき徳目が例証文によって、具体的に説明され、共に各徳目を共有化して、中世キリスト教社会を支えるよう説明されている。また、当時の特に庶民たちの今日では存在しない職業人のことなども各階層の中で説明されているが、珍しい色付きの人物の木版画の挿入により、視覚によっても分かり易く読者に説明する姿勢が見出され、新たな文学、新たな時代の予兆も感じられる作品ともなっている。

#### 註

1. 中世時代のJohn Gowerの「Confessio Amantis」の第7巻では王侯の心得と云うべき学問や君主道が説かれ、王侯が善政を行うよう定めた倫理学の中の美德としての7つの徳、即ち、謙虚、愛徳、忍耐、剛毅、寛大、節制、貞節や、自分の国をどのように治めるかを問題にしている政治学の徳、真実、寛大、正義、憐憫、貞節など説明されているが、中世の他の政治的書物「Secreta Secretorum」などの政治学分野では知恵、正義、堅忍、節制の徳目が説明されている。
2. 正義に関する例証文

ローマの高官の話	不法行為 (not juste)
マルクス レグルスの話	約束を守ること (kepe his oth)
ローマの公爵エメリエの話	戦時の法を守ること (lawes to kepe)

ハンニバルとの話	約束を守ること (a false oth)
ファブリクスの話	家来の忠誠心を守ること <i>loyalte</i>

## 3. 憐憫に関する例証文

ローマの裁判官の話	娘の憐憫と赦し <i>pity, pardone</i>
シーザーの話	敵の王への憐憫 <i>pity</i>
アレキサンダーの話	老臣下への憐憫

## 4. 謙虚さに関する例証文

パブリウス シーザーの話	謙遜した態度 <i>humble</i>
スキピオの話	慎ましい生活 <i>humble</i>
ファビアンの話	謙虚な態度 <i>meeke, humble</i>
ヴァスパシアン皇帝の話	謙虚な姿勢 <i>humble</i>
ヨブの話	謙虚な態度 <i>humble</i>

## 5. 忍耐、憤怒に関する例証文

アレキサンダーへの非難の話	部下への忍耐 <i>patiently</i>
シーザーへの非難の話	部下への忍耐 <i>patiently</i>
シーザーの家系の話	部下への忍耐 <i>patiently</i>
アンティゴヌス王の話	部下への忍耐 <i>patiently</i>
プラトンの師のタレントの話	怒りの抑制 <i>yre and wrath</i>
セネカの話	怒りの抑制 <i>angry, yre</i>

## 6. 清貧に関する例証文

ローマの将軍スキピオの話	私欲を求めず名声を維持 <i>not avaryce</i>
アルタゴネ王の話	清貧を維持 <i>wylful poverté</i>
オーガスティンの話	貪欲時のローマと清貧時のローマ <i>wylful poverté</i>
枢機卿ヨハネの話	貪欲に支配され、清貧の精神の消えたローマ

## 7. 寛大さに関する例証文

シーザーの話	臣下に対する気前よさ <i>large</i>
ティツウスの話	気前よさ <i>large, lyberal</i>
シーザーの話	臣下への配慮

## 8. 神への忠誠心に関する例証文

カインとアベルの話	カインの不信心 <i>envye</i> と樂園追放
ダビデの話	若いときの罪と逆境と神への帰依 <i>ritorned to God</i>
イスラエルの民の話	罪と逆境 <i>synne</i>

## 9. 主君に関する例証文

主人と臣下の話	裁判での臣下の主人への忠誠 <i>faithful</i>
主人と臣下の話	主人の身代わりとなった臣下への忠誠 <i>faith to his master</i>

## 10. 信用に関する例証文

ローマのファビウスの話	ハンニバルとの信用、約束 <i>beleve and fayth</i>
-------------	--------------------------------------

## 11. 疑義に関する例証文

暴君ディオニシススの話	臣下への疑念は国の崩壊をもたらす <i>suspescion</i>
-------------	------------------------------------

## 12. 友情に関する例証文

蜂の自然的例証	愛情を持って共同体を保護 friendshyp&good wylle
カトーの話	利害関係の愛情は商品marchaundyseの売買と同じ
アラブの哲学者の話	逆境時助ける友が真の友 trewe frendes, in adversite
バンダクの商人の話	逆境時の真の友 ferme and trewe love

## 13. 色欲に関する例証文

哲学者デモクレオンの話	眼をくり抜き色欲を避ける flesshly desire
ヴァレリアの話	顔を傷つけ女性を避ける
プラントンの話	人里離れ、色欲 lechery を避ける

## 14. 虚偽に関する例証文

悪魔の蛇の話	虚偽を信じたアダムとイヴの楽園追放 lye
シラクサネの話	嘘を言わない婦人とセシユ王 lye

## 15. 食欲に関する例証文

アンティゴヌス王の話	貪欲な王の哲学 covetise
ローマの貴婦人の話	貪欲な心も持たなかった covetyse chastyte
ローマの貴婦人の話	死後食欲の罪が暴かれ金貨が口に注がれる covetise
ローマのある男の話	貪欲により、殺人を犯す avarice
皇帝アントニーの話	貪欲なエジプト王と同じ罪の皇帝 avarice

## 16. 詐欺に関する例証文

両替商アルベルトの話	詐欺、虚偽の取引 falsely, fraudulent
ある商人の話	詐欺を働く両替商 deceyvour
イソップ物語	犬とチーズの話 covertise

## 17. 貞節に関する例証文

ヒポクラテスの話	誘惑に負けず貞節を守り通す continence
スキピオの話	色欲の館を廃止し、兵士を守る lecherye, contynence
哲学者ヴァレイアンの話	貞節を守り通したこと chaste man

## 18. 喜びに関する例証文

船員の妻リナの話	死んだ思っていた夫の帰宅したことで、余りの喜びで突然死んだこと so gladde and joyous
ある女性の話	死んだと思っていた息子の帰宅と喜びでの突然の死
フィロメヌスの話	笑いすぎて死んだ話
ティテウスの話	喜びすぎて麻痺したが医者の治療で回復 helth

## 19. 酩酊に関する例証文

ある隠遁者の話	酩酊により色欲と殺人の罪を犯す dronkenshyp
イブの話	禁断の実を食べたイブの罪 gluttony
自然の動物の話	牛は草原、象も森だけ満足 measure
ノアの話	酩酊による悪態 drunkness
ロトの話	酩酊による姦淫 drynkyng
ボエティウスの話	酩酊による殺人 drunkness

ヘロデ王の話	飲酒による殺人 glotony, dronkship
バルサザール王の話	酩酊による敗北と破滅 drunkness
20. 盗みに関する例証文	
ロンバルディの貴族の話	旅籠屋の召使の盗み thief
巡礼中の父子の話	旅籠屋の主人の強欲 covetyse
巡礼中での息子の死	旅籠屋のメイドの強欲と色欲 lecherye
21. 神への畏怖の念に関する例証文	
皇帝フレデリック2世の話	裁判官を恐れ誠実な生き方を求める trewly
デニス王の話	国王は絶えず神を意識すること vengauce of God
22. 忍耐に関する例証文	
ソクラテスの話	弟子たちへの忍耐の進言 paciencie
ソクラテスの話	悪妻への忍耐 suffering
23. 浪費に関する例証文	
ヨハネの話	娘達に生前に財を渡し、路頭に迷う dyspende, waste

## 参考文献

- N.F. Blake, 「Caxton's Own Prose」, Andre Deutsch, 1973, U.K.  
 N.F. Blake, 「Selections from William Caxton」, Oxford University Press, 1973  
 Judith Ferster, 「Fictions of Advice, the Literature and Politics of Counsel in Late Medieval England」, U.of Pennsylvania Press, 1996  
 L.M. Kekewich, 「Books of Advice for Princes in 15<sup>th</sup> Century England」, The British Library, 1987  
 K.L. Scott, 「The Caxton Master and His Patrons」, Cambridge University Press, 1976  
 「William Caxton」, Catalogue of an Exhibition, Cambridge University Press, 1976  
 「Middle English Survey, critical essays」, ed. by Edward Vasta, University of Notre Dame Press, 1965

## TEXT

- 「Caxton's Game and Playe of the Chesse」, ed.by E.A. Axton, Echo Lib., 2008  
 「Caxton's Aesop」, ed. by R.T. Lenaghan, Harvard University Press, 1967  
 Jacobus de Cessolis, 「The Game of Chess」, tr. by William Caxton, The Scolar Press, 1976  
 John Gower, 「Confessio Amantis」, O.U.P